

<h1 style="font-size: 2em;">指導資料</h1> <p>鹿児島県総合教育センター 令和2年10月発行</p>	<h2 style="font-size: 2em;">外国語 第94号</h2>	
	対象校種 高等学校 特別支援学校	

「指導と評価の一体化」を目指した英語教育に向けて

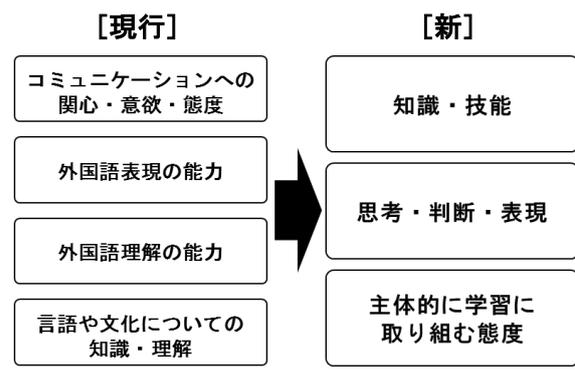
高等学校では、令和4年度入学生から年次進行で新学習指導要領が実施され、教科書と評価の観点等が変更になる。本稿では学習指導要領等に基づいた指導と評価の年間計画（シラバス）の作成及び指導と評価について、パフォーマンス・テストの事例を含めて、その手順や準備等を述べる。

1 教科書と評価の観点が変わる

高等学校では、令和4年度入学生から年次進行で新学習指導要領が実施される。学習指導要領が変わると、大きく変わるのは教科書である。例えば、現行では高校卒業時まで3,000語程度の語彙を扱っているが、令和4年度入学生から、4,000～5,000語程度と語彙数が大幅に増える。語彙が増えれば、より深い内容を扱うことになる。また、中学校の新教科書では各ページにQRコードがあり、スマートフォン等でそのQRコードを読み取れば、教科書の音声聞けるようになっている。高校生用の教科書も同様になると予想される。

さらに、平成31年3月の「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」では、高等学校においても指導要録に「各教科・科目の観点別学習状況を記載すること」とされた。新学習指導要領下では、観点別評価の観点も**資料1**のように現行の4観点から3観点へと変わる。これは、各教科等の目標や内容を資質・能力の三つの柱で再整理した新学習指導要領の下での指導と評価の一体化を推進するためのものである。

資料1 外国語の評価の観点について



2 指導と評価の年間計画（シラバス）

新学習指導要領では、話すことが[やり取り]と[発表]の二つに分かれ、4技能（聞く、話す、読む、書く）が「五つの領域」（以下5領域）とされ、この5領域の目標と言語活動の展開例等が掲載されている。評価に関しても、各領域を3観点で評価することが求められる。科目「英語コミュニケーションI」等では、5領域×3観点=15項目となり、大変な負担だと感じるかもしれないが、各単元で領域を限定して評価したり、また中学校の『「指導と評価の一体化」のための学習指導に関する参考資料』のように、一度の機会に3観点を同時に評価したりして、学期及び学年を通して、各領域および各観点をバランスよく評価する工夫も可能である。

ただ、留意する点が幾つかある。まず、3観点の中の「主体的に学習に取り組む態度」は、思考・判断・表現の項目等と合わせて評価するとされているが、粘り強い取組等とも関連する観点であり、中学校でも評価時期は単元末や学期末等とされている（最初はできなくても、粘り強く取り組み、最終的な評価がよくなる生徒もいる）。考査等では評価が困難と思われる観点でもあり、どのような資質・能力に注目し、いっどう評価すべきか、事前の計画が必要である。

また、「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」、「書くこと」の表現に関する3領域に関しては、考査での評価よりも、パフォーマンス・テストでの評価が好ましい。指導したことを評価することを念頭に置き、この3領域についても、目標、指導の在り方、評価の在り方の3点を事前に決めておいた方がよい。

以上のことを鑑みると、指導と評価については、生徒の実態に合わせて、計画を作成し、実施していくべきだと考えられる。具体的な手順は以下の資料2のようになると予想される。

資料2 指導と評価の手順

- ① 各教科・科目の学習目標を設定。
- ② 「内容のまとまり」（外国語の場合は、5領域）ごとの評価の観点の趣旨と評価方法を設定。
- ③ 単元又は題材ごとの学習目標と「評価規準」「評価方法」を設定し、「指導と評価の年間計画（シラバス）」を作成。
- ④ シラバスに従って、授業を実施。
- ⑤ 生徒の形成的評価を随時行い、その結果を基に学習や指導を改善。
- ⑥ 単元末・学期末・学年末で記録に残す評価を領域・観点ごとに総括。

資料2で注目すべきポイントは、「指導と評価の年間計画（シラバス）」である。前述したように、教科書を見て、学習指導要領を確認しつつ何を目標とし、どう指導して、いつどのように

何を評価するか計画を立てることがこれまで以上に大切になる。内容のまとまりと各単元の目標設定と指導、そして評価時期とその方法を定める等々の作業量を考えると、遅くとも11月頃には次年度の計画の作成を開始したい。

3 指導について

前述したように、令和4年から新学習指導要領が実施であるため、早期から段階的に準備していきたい。

まず指導と評価のうち、指導については、当然ながら「学習指導要領（平成30年告示）解説」を参考にすべきである。解説には用語の定義や指導手順が説明されているので分かりやすい。

事例として、英語コミュニケーションⅠの「読むこと」の領域を挙げる。資料3は、新学習指導要領の「読むこと」の「日常的な話題」を扱った目標アと言語活動（ア）、そして授業での展開例である。

資料3 英語コミュニケーションⅠ「読むこと」

目標
ア 日常的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、多くの支援を活用すれば、必要な情報を読み取り、書き手の意図を把握することができるようにする。
内容（言語活動）
（ア）日常的な話題について、基本的な語句や文での言い換えや、書かれている文章の背景に関する説明などを十分に聞いたり読んだりしながら、電子メールやパンフレットなどから必要な情報を読み取り、書き手の意図を把握する活動。また、読み取った内容を話したり書いたりして伝え合う活動。
言語活動の展開例
① 日常的な話題についての電子メールを読んで、どのような目的で書かれたのかについて理由を述べて話し合う。
② 電子メールの差出人や受取人、件名、書

かれた目的などについて、教師の質問に答えながら確認する。

- ③ ペアを作り、一人は友人Aからの返信、もう一人は友人Bからの返信を黙読する。
- ④ それぞれの返信の内容を、ペアの相手に口頭で説明する。その際、生徒の状況や英文の難易度によって、上記③では、ペアで同じ情報を読んで内容を確認し合い、④で異なる生徒とペアになって返信内容を伝え合う活動を行うことも考えられる。
- ⑤ 教師は生徒全員に友人AとBの返信を示し、それぞれの内容を全体で確認する。

(学習指導要領(平成30年告示)解説抜粋)

現在、大学入学共通テストへの関心が高まっているが、大学入学共通テストは学習指導要領の内容に従って出題されていることを確認したい。学習指導要領の目標や内容、言語活動を読むと、日常的な話題を扱った文書から必要な情報を読み取り、書き手の意図を問う問題の出題等が予想される。試行問題の事実と意見の区別を問う問題も、同じく新学習指導要領に示された内容である。このように学習指導要領を確認し、指導に活かすことが、重要である。

また、資料3を参考にして、次に扱う単元に関して、設定した目標について指導手順と3観点を含めた評価方法を考え、計画を作成した上で授業することも、現在分かっていることと不明なことを明確化するという点で有効である。

4 評価について

評価について、現時点で参考にできる冊子資料として、令和元年6月発行の国立教育政策研究所「学習評価の在り方ハンドブック(高等学校編)」と令和2年3月発行の『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(外国語 中学校)』の二つが挙げられる。前者は、新しい学習評価について、丁寧に説明している。また後者は、中学校向けの資料ではあるが、3観点での評価について「第3編 単元ごとの学習

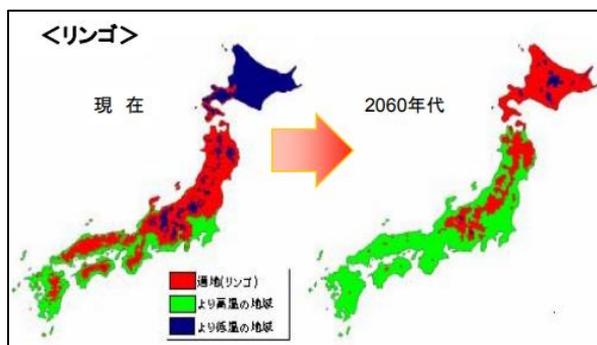
評価について」で事例を示しており、分かりやすい。なお、この学習評価に関する参考資料の内容については、文部科学省の山田誠志教科調査官の動画解説が、(財)日本英語検定協会の「英語情報Web」(<https://eigojoho.eiken.or.jp/>)で視聴可能であり、参考資料と併せて確認すると評価についての理解が深まる。

5 パフォーマンス・テスト

前述したように、話すこと[やり取り]、話すこと[発表]、書くことの表現に関する3領域の評価に関しては、生徒の実践を評価するパフォーマンス・テスト(以下PT)が望ましい。PTは、事前指導、実施形態、評価方法、待機中の生徒への指導など事前準備が多く、少しずつ段階的に導入したいところである。

参考として、二つの県内の高等学校の例を挙げる。A高校では、話すこと[発表]に関するPTを実施している。1年生のテストは、自分のhometownと子供時代について90秒で述べる描写タスクである。2年生のテストは、環境問題を扱い、グラフ1点(東京の猛暑日の日数の年次変化)と図2点(りんごの栽培適地(資料4)とサンマ漁場の現在と未来の変化予測)の計3点から2点を選び、それぞれ30秒程度でその変化と、その変化が意味することを説明する説明タスクである。

資料4 りんごの栽培適地(環境省, 2007)



両テストとも、テストの手順や評価基準(ルーブリック)、予想される教師と生徒の会話(テスト運用部分のみ)が事前に生徒に示されており、

生徒は手順と評価について理解できる。1年生には、特に注意すべき文法事項（hometownの描写は現在形を、自分の子供時代については過去形を持続して使用しなければならない）についても説明が与えられている。このようにテストのタスク内容が事前に明確に示されれば、prepared speechとなり、生徒が事前に練習して様々な表現が定着することが期待できる。なお、同活動は新学習指導要領の英語コミュニケーションⅠの「話すこと[発表]」においても、評価の観点を3観点に変更して使える。

次に書くことに関して、B高校の事例を示す。同校では、1年生を対象に書くことに関するPTが授業中に実施されている。トピックは“Write about your favorite cartoon character.”で、10分間の描写タスクである。生徒は事前に同様の“Write about your favorite famous person.”というトピックで、人の描写について授業や添削等を通じて学んだ後で、このテストを受けて、即興で書いている。B高校でも内容と文法、表現（語彙等）の3点で評価するルーブリックが事前に示されている。

同活動もまた、新学習指導要領の英語コミュニケーションⅠの「書くこと」でも使うことができる。「書くこと」の目標Aは「…情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して文章を書いて伝えることができる」である。そのため、生徒は登場人物の説明（何という漫画のどのような人物なのか）と、なぜfavoriteなのか根拠を踏まえて1段落で書けばよい。

下記は同校の高校1年生の解答例である。

Matsukaze Tenma is a junior high school student. He is really good at playing soccer. The reason I like him is that he loves soccer. He respects not only his teammates but also other teams. I want to be a person like him.

1年生での初めてのPTということを考えてよく書けている。この生徒に形成的評価を行い、アドバイスを与えるとすれば、読み手のことを

配慮し、漫画のタイトルを加えるべきこと（読み手が紹介した本を読みたくなくてもタイトルがなければ読めない）と、好きな理由の例がサッカーへの愛情ではなく、人間性についての例であるため、理由の補足説明としての論理性を高めるべきことの2点が挙げられるだろう。

なお、観点別学習評価と関連させて、上で取り上げた論理性を「思考・判断・表現」の評価に、表現の正確さを「知識・技能」の評価に、そして継続的な振り返りの様子を「主体的に学習に取り組む態度」の評価に取り入れたルーブリックを作成し、生徒と共有すれば、より効果的な指導や評価へとつながる。

以上のように、PTを少しずつ導入し、指導と評価について、同僚と共通理解を深めながら進めることが望ましい。

6 最後に

中学校の『「指導と評価の一体化」のための学習指導に関する参考資料』には、他にも読むことと聞くことに関して、「知識・技能」、「思考・判断・表現」それぞれの考査での出題例が掲載されていて参考になる。

評価について理解が進めば、指導が変わる。指導が変われば、生徒の資質・能力の向上につながる。新学習指導要領の実施に向けて、「学習指導要領解説」と『「指導と評価の一体化」のための学習指導に関する参考資料』をまずは一読し、準備を進めることをお勧めしたい。

—引用・参考文献—

- 環境省「中央環境審議会地球環境部会 第5回懇談会」資料（平成19年）
- 向後秀明 編著『平成30年版学習指導要領改訂のポイント』（平成31年）
- 国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校』（令和2年）
- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説（平成30年告示）外国語編・英語編』（令和2年）

（教科教育研修課 有嶋 宏一）